

道徳教材：ベーブ・ルースの「三塁ライナー」の誕生

——子ども向け犠牲バント物語のルーツを探る——

功刀俊雄（奈良女子大学）

はじめに

本稿は「星野君の二塁打」研究の延長戦である。1980年代なかばの小学校3年生用の道徳副読本に少年時代のベーブ・ルース（本名ジョージ・ハーマン・ルース）を主人公にした「三塁ライナー」という読物教材が載っている¹⁾。この教材は、犠牲バントの指示が出されていたにもかかわらずヒッティングに出て試合終了後に指導者から諭されるという物語展開の点でも、また、道徳の内容のうち「規則の尊重」を学ぶためのものと位置づけられている点でも「星野君の二塁打」と同じで、1970年代から道徳の副読本に載りはじめていた「星野君の二塁打」の二番煎じ教材とみなすことができるだろう。

「三塁ライナー」が道徳副読本に掲載された1980年代なかばまでの戦後日本の子ども向け伝記物語の中で、スポーツ選手で最も多くの作品が書かれたのがベーブ・ルースであった。その数は30点以上にのぼるが、表1²⁾に示したように、およそその3分の1にあたる10点ほどの作品でジョージ少年に犠牲バントの指示が出される場面が描かれている。本稿ではこの場面のお話を犠牲バント物語と呼び、「三塁ライナー」の誕生に至るその変容の過程を遡りながら犠牲バント物語のルーツを探ってみることとする。表1からも推測されるように、最初の物語はそれ以降の物語とは違って後のホームラン王誕生の物語とでも言えるようなお話であった。しかもそれはアメリカの作品の翻案であった。

表1 1980年代なかばまでの戦後日本の主な犠牲バント物語

作者（発行年）	打撃結果	試合結果	見出し
白木 茂（1958）	キャッチャーフライ	2対1（逆転勝ち）	はじめてのホームラン
久米元一（1959）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	チームのために
久米元一（1961）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	みんなのために
久保 喬（1963）	ライトライナー	0対1（負け）	グラウンドの教え
砂田 弘（1972）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	左ききの名キャッチャー
久米元一（1973）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	犠牲バント
砂田 弘（1977）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	マシアス先生にであう
砂田 弘（1979）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	マシアス先生のおしえ
久米元一（1981）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	ぎせいバント
砂田 弘（1983）	3塁ライナー	0対0（引き分け）	マシアス先生のおしえ

検討の対象は、第1節が「三塁ライナー」、第2節が「三塁ライナー」の原作、第3

節が原作の原作、すなわちルーツと思われる物語である。各節の題目に「うなずき」を掲げた。いうまでもなくジョージのうなずきのことであるが、うなずきの有無、あるいはうなずく場面やその意味にそれぞれの犠牲バント物語の特徴が現れていると考えられるからである。なお引用中の下線はすべて功刀が付けたものである。

1. 「三るいライナー」における了解のうなずき：約束破りの物語

まずは「三るいライナー」を読んでいただく。

.....

「ジョージ、たのんだぞ。」

二年生のおうえんだんが、さげびました。二年生チームと三年生チームの野球のしあいです。0たい0でむかえた九回のうら、一人アウト、ランナー三るいです。ようし、ホームランをかつとばしてやるぞと、意気どむジョージに、

「バントをするんだぞ。三るいランナーを走らせるからな。」

と、マシアス先生がささやきました。思いつ切りうちたかったのにと、ジョージは、心とはんたいにしぶしぶうなずきました。

ピッチャー、だいい球。大すきなベルトの高さのストライク。ジョージは、思いつ切りバットをふりました。カーン。ボールは、すごいライナーになって三るいしゅの頭の上へ。しめた、ヒットだと思ったしゅん間、三るいしゅがさつととび上がって、ボールをつかんでいました。バントだと思ってスタートしていた三るいランナーは、るいへ帰ることができません。しあいは、引き分けにおわりました。

「野球は一人でやるスポーツではないよ。みんなで力を合わせてはじめてかてるのだ。」

がっかりしたジョージの心には、ざんねんそうな三るいランナーの顔とマシアス先生のことばが、いつまでもきえませんでした。

ホームラン王、ベーブ＝ルースの八才のときの話です³⁾。

考えよう

- 1 ジョージがバットをふったとき、どんな気持ちだったでしょう。
- 2 自分のかつてな考えで、やくそくごとやきまりをやぶったことはありますか。

◆ 久米元一 作

.....

「三るいライナー」を載せた副読本には原作は明記されていないが、原作者久米元一(1902年-1979年)の名は示されている。久米には犠牲バント物語が4点あった(表1)。引用中で下線を付けたのは久米の物語のいずれにもない記述である。ここでは最初の下線部の特に「うなずきました」に注目する。なぜなら、副読本に「三るいライナー」を掲載する際の重要でかつ意図的な改作と考えられるからである。

表2は久米作品と「三るいライナー」におけるバントを指示された後のバッターボックス

スに入るまでのジョージに関する叙述を比較したものである。ジョージが思い切り打ちたかったのはいずれにも共通しているが、1961年版以降の久米作品ではしぶしぶとバッターボックスに入ったのに対して、「三るいライナー」ではしぶしぶうなずいたのであった。このうなずきはバントの指示に対する了解を意味するのであろう。ジョージは思い切り打ちたかったけれども、指示に従ってバントをすることに同意したのである。この了解と同意は副読本の「考えよう」の第2項に照らし合わせれば「やくそくごと」に該当する。すなわち、「三るいライナー」ではジョージはマシアス先生との約束を破ったことに改作されたのであった。久米の物語では決して約束はしていない。

表2 久米作品と「三るいライナー」におけるバント指示後のジョージ

久米 (1959年)	久米 (1961年 [1973年・1981年])	「三るいライナー」
ジョージはがっかりしました。 <u>思いきりふりたかった</u> のです。 [69頁]	ジョージはがっかりしました。 <u>思いきり</u> うって、みんなをおどろかしてやりたかったのです。/(ぼくのようにあたっているバッターに、バントをさせるなんて、マシアス先生もどうかしている。 <u>つまんないなあ</u> 。)/ジョージはしぶしぶと、バッター＝ボックスにはいりました。 [1961年、230頁]	<u>思い切り</u> うちたかったのにと、ジョージは、心とはほんたいにしぶしぶうなずきました。 [54頁]

注：久米の1973年版及び1981年版では表中の「ぼく」が「おれ」となっているなど若干の違いがある。

心とは反対にうなずいたとあるから、実はジョージは了解も同意もしておらずバントをせずに思い切り打つつもりでうなずいたという解釈も成り立ちうる。虚偽のうなずきである。しかし、道徳副読本の作成者にこの教材で虚偽について考えさせようとの意図はないはずであるから、やはり「三るいライナー」は約束破りの物語に改作されたとみなしてよいだろう。

ちなみに、「星野君の二塁打」においても、バントを指示された星野君は曖昧な返事をしてバッターボックスに入ったのであるが、翌日の監督の話ではヒッティングに出た星野君の行為は「ぼくとの約束を」破ったことにされていた。この点においても「三るいライナー」は「星野君の二塁打」と同様と見ることができるだろう。

なお、表1の作品の中で唯一、1963年の久保(1906年-1998年)の犠牲バント物語でバントを指示された後のジョージが「しぶしぶうなずいた⁴⁾」とされており、「三るいライナー」の改作の際に、もしも原作以外の犠牲バント物語も参照されたのであれば、久保の作品が参照されたという可能性もなくはない。同様に、2番目の二重線の下線部のうち「マシアス先生のことばが、いつまでもきえませんでした」の部分に関しては、砂田(1933年-2008年)が繰り返し「このときの先生のことばを、ルースは一生わすれませんでした⁵⁾」と記していて、これが参照されたという可能性もなくはない。その前の「三るいランナーの顔」に関してはいずれの犠牲バント物語でも言及されていない。新たに挿入されたものと思

われる。

「三るいライナー」の二つの（実線と二重線の）下線部、すなわち、バントを指示された後のジョージの反応とマシアスに諭された後のジョージの反応はそれぞれの犠牲バント物語を読み取り比較する際のキーポイントとなる。以下ではこの2点に注目して物語を読んでいく。

2. 原作はうなずかない：自分勝手の物語

前述のように「三るいライナー」掲載の副読本には原作は示されていない。「三るいライナー」誕生の経緯を知るためには久米のいずれの作品が原作なのかを明らかにしたいところであるが、久米の四つの犠牲バント物語のうちどれが原作かを特定することは難しい。ここでは原作を探りながら、むしろ久米の犠牲バント物語の間の異同、改作のプロセスで何が変えられ何が変えられなかったのかについて検討する。そうすると原作を特定できなくても原作であった可能性のある物語の共通点としてジョージが一度もうなずかないという特徴が浮かび上がってくる。それは何を意味しているのか。久米の犠牲バント物語はどのような物語であったと解釈できるのであろうか。

まずは前提的な確認事項を一つ述べておく。久米の作品は4点あると述べたが、1973年版と1981年版の犠牲バント物語には漢字表記かひらがな表記かなどの違いがあるもののそれ以外の叙述は同じであり、実質的には三つのバージョン（1959年版、1961年版、1973年版=1981年版）があったことになる。

次に、三つのバージョン間の共通点について見てみる。変わらないのは、0対0で迎えた9回裏、1アウト、ランナー3塁でマシアス先生がバントの指示を出したのにもかかわらず、ジョージが第1球を強打して3塁ライナーとなってダブルプレー、試合は引き分けに終わった、という試合の展開と、試合終了後の「野球は、ひとりでやるスポーツではないよ。みんなが力を合わせて、はじめて勝てるんだ。さっき、きみが、うまくバントしていたら、一点はいつていただろう」（表3）とのマシアス発言である。試合展開と、「さっき」以降の一文を除いたマシアス発言は「三るいライナー」とも共通であり、この限りでは三つのバージョンのいずれも「三るいライナー」の原作であった可能性があるかのように思われる。

しかし、1959年版は、ジョージたちの学校と隣町の小学校との試合という物語の設定とマシアスのバントの指示が鼻の頭をこするサインである点で、他の二つのバージョンとも「三るいライナー」とも異なっており、「三るいライナー」の原作とは認められない。1959年版以外の二つのバージョンでは、試合はジョージのいる2年生チームと3年生チームの試合であり、またマシアスのバントの指示は口頭でささやかかれており、「三るいライナー」と同様である。従って、ここまでの検討では「三るいライナー」の原作であった可能性があるのは、1961年版、1973年版、1981年版ということになる。

ところで、三つのバージョンの間で三者三様の違いがあつて版を改めるごとに改作されたのは試合終了後のマシアス発言を受けたジョージに関する記述である（表3）。

表3 久米作品の三つバージョンにおける試合終了後のマシアス発言とジョージの反応

1959年版 (70頁)	1961年版 (231頁)	1973年版 (64-65頁) = 1981年版 (77頁)
<p>「ジョージ。<u>野球は、ひとりでやるスポーツではないよ。みんなが力を合わせて、はじめて勝てるんだ。さっき、きみがうまくバントしていたら、一点は</u><u>いっていただろう。</u>」</p> <p>と、やさしく言いました。</p> <p>「わかりました、先生。」</p> <p>ジョージは、<u>こっくりとうなずきました。</u></p>	<p>「ジョージ。<u>野球は、ひとりでやるスポーツではないよ。みんなが力を合わせて、はじめてかてるんだ。さっき、きみが、うまくバントしていたら、一点は</u><u>いっていただろう。</u>」</p> <p>と、やさしく言いました。</p> <p>ジョージは、<u>がっくりとうなだれました。</u></p> <p>マシアス先生のおっしゃるとおりです。ジョージは、チームのことをかんがえず、じぶんひとりで、すばらしいホームランをかつとばして、みんなをおどろかせてやろう、と思っていたのでした。そのために、せっかくかてるチャンスをおぼしてしまっただけです。</p> <p>ジョージは、しあいにかつためには、ときには、じぶんがぎせいにならなければならない——ということをおぼしました。</p> <p>また<u>野球には、この世の中とおなじように、いろいろなルール(きそく)があって、じぶんかつてなことはゆるされない——</u>ということがわかりました。</p> <p>こうしてジョージは、マシアス先生の教えと、野球によって、すこしずつ進歩していきました。</p>	<p>「ジョージ、きみはスクイズのたいせつなことも知らないのか？<u>野球はひとりでやるスポーツではない。みんなが力を合わせて、はじめて勝てるんだ。さっききみが</u><u>うまくバントしていたら、一点と</u><u>っていただろう。</u>」</p> <p>といった。</p> <p>ジョージは、<u>ぷっとふくれた。</u></p> <p>試合に勝つためには、ときにじぶんが犠牲にならなければならない——ぐらいのことは、百も承知だった。</p> <p>(しかしあのばあい、おれがバントしていたって、かならず一点はいるとはかぎらんじゃないか。どうせわからんものなら、あたってはいるおれに、思いきり打たせたほうが、ずっと試合がおもしろくなるだろう。)</p> <p>これがジョージの考えだった。</p> <p>マシアス先生は、野球によってジョージに、</p> <p>「<u>この世の中にはいろいろなルールがあって、じぶん勝手なことはゆるされない。</u>」</p> <p>ということをおしえようとしたのだが、そのころのジョージには通じなかった。</p>

1959年版では「わかりました」と素直にうなずいている——久米の犠牲バント物語でジョージがうなずくのは1959年版のこの1箇所だけである——が、1961年版では「がっくり」とうなだれ、1973年版=1981年版ではぷっとふくれている(表3の実線の下線部)。

「三るいライナー」では「がっかり」しているので、この点に関しては1961年版が「三るいライナー」の原作であった可能性がある。また、「三るいライナー」には「マシアス先生のことばが、いつまでもきえませんでした」(2番目の二重線の下線部)とあって、ジョージが心の中で反省しているようすが示唆されているが、1973年版=1981年版では、最後に「そのころのジョージには通じなかった」とあるように、マシアスのことばが心に残るということはあるそうにない。これに対して1961年版では、マシアスのことばを受けてホームランを打とうと思ったことを反省しチーム・プレイの大切さや自分勝手は許されないことを悟っているので、この点からも「三るいライナー」の原作は1961年版と考えることができそうである。

しかし、三つのバージョンのうち道徳副読本の編集の意図に最も適しているのはどれかと考えてみると、それは1973年版=1981年版であったと見ることができるのではなかろうか。なぜなら、「三るいライナー」の「考えよう」の第2項にあった自分勝手な考えが詳しく語られているのは1973年版=1981年版であったし、ルールという言葉に着目してみると、1961年版では基本的には野球のルール(きまり)の話をしているのに対して、1973年版=1981年版では世の中一般のルールの話に変えられているからである(表3の波線の下線部)。1973年版の書名には「だだっ子」とある。また、発行の時期が「三るいライナー」に最も近いのは1981年版であった。このように考えてみると1973年版ないしは1981年版が「三るいライナー」の原作であった可能性も否定できないように思われる。

原作の探索はここまでである。結局のところ原作は1959年版以外のいずれかということしか分からず、特定することはできないように思われる。

では久米の犠牲バント物語とはどのような物語だったのであろうか。1959年版のうなずきはチーム・プレイの大切さが分かったという納得のうなずきだったのであろう。物語の見出しは「チームのために」であった。1961年版では、チーム・プレイの大切さも悟っているのであるからうなずいてもよかったと思われるが、一度うなだれてその後に反省して悟ったのが、チーム・プレイの大切や世の中一般にも通じる自分勝手は許されないことであったとされているから、反省の物語と見ることができるだろう。1959年版と1961年版に共通しているのはバントの指示にもかかわらずヒットイングに出てダブルプレーをくうという失敗とマシアスの指導を通じて大切なことを学んだということであり、その意味で両者は成長物語とみることができるだろう。これに対して1973年版=1981年版の物語ではジョージは何一つ学んでいない。マシアスの指導を受け入れないどころか反発さえしている。これをいかなる物語と呼んだらよいのだろうか。実は、1973年版=1981年版の犠牲バント物語は伝記物語全体の第2章の中の一つのエピソードで、第2章のタイトルは「反抗時代」である。このように見てみると、1973年版=1981年版の犠牲バント物語は反抗物語ということになるだろう。

上述のように「三るいライナー」の原作となりうるのは、1961年版と1973年版=1981年版であった。この二つのバージョンの物語は上では反省物語と反抗物語とみなしたから

対極的なのであるが、共通点に着目すれば、ジョージの自分勝手な行動を戒める物語であり、主語をジョージに転換すれば自分勝手の物語ということになるだろう。わがまま物語と言ってもよい。自分勝手わがまま物語は野球の話を超えた生活全般に共通する規範からの逸脱を戒める道徳物語でもあった。

ここで久米が1961年版を執筆する際に参照した文献に触れておこう。1961年版には「資料⁶⁾」としてベーブ・ルース関連文献の解説が付けられている。そこで挙げられている子ども向けの伝記物語4点のうち犠牲バント物語が含まれている2点については次節で検討するが、ここでは犠牲バント物語のない沢田⁷⁾(1894年-1969年)と赤坂⁸⁾(1912年-?)の作品を採りあげる。というのは、久米が1961年版の試合終了後のジョージに関する叙述に自分勝手は許されないことなどを加筆する際に参照されたのがこの2作品だったと思われるからである(表4)。とりわけ沢田の作品には犠牲バントに関する言及がある⁹⁾。

表4 沢田と赤坂の作品におけるわがまま・自分勝手を戒める叙述

沢田 (1950年、22-23頁)	赤坂 (1960年、28-29頁)
<p>そのうえに野球は団体競技である。九人の選手が、心をあわせて、一つにならなければ、けっして試合に勝てない。何よりも大切なことは、めいめいがその義務をつくすということである。その間に、いささかのわがままも、自分勝手もゆるされぬ。時にはぎせいバントで、自分はアウトになっても、チームのためにつくさねばならぬ。それでチームが勝てば、自分も勝ったことになるというのが野球である。</p> <p>ジョージは野球をはじめて、わがままでやめて、ぜんたいのために義務をつくすということが、どんなに貴いかということをおぼえた。</p>	<p>野球をするには、チームがたいせつです。どんなにすくなくとも九人そろわなければ、ゲームはできません。この九人がここをあわせて、あいてにぶつからなければ勝つことができません。わがままだ、じぶんかってなことは、ゆるされないのです。</p> <p>ジョージは、野球をはじめて、ぜんたいのためにつくすということも、知ることができたのでした。</p>

では、1973年版の改作にはどのようなことがあったのだろうか。反省物語から反抗物語への改作には、もしかすると1972年の砂田のベーブ・ルース伝「あとがき」の影響があったのかもしれない。砂田は次のように書いている。

ルースは、英雄——ヒーローではあっても、偉人ではありませんでした。伝えられるところによると、彼のわがままで粗暴な性格は、生涯つづいていたようです。にもかかわらず、彼が長い期間にわたって、少年たちのヒーローの座に君臨しえたのは、その天才的なバッティングの魅力のほかに、一見わがままに見えるその性格に、じつは、子どもたちの天真らんまんな性格と共通するところがあったからでしょう¹⁰⁾。

1961年版ではジョージはわがままな行動をとったとしてもまだ素直な少年だったが、

1973年版ではたんにわがままだけでなく粗暴な少年に変えられている。砂田は後に次のようにも述べていて、1970年代はベーブ・ルースの子ども向け伝記物語の転換期だったようである。

これまで子どもむけの「ベーブ＝ルース伝」のほとんどは、ルースの人間としての欠点についてはふれないのがふつうでした。しかし、じっさいのルースは欠点だらけの人間で、その欠点ゆえに、多くの人びとに愛されていたという一面があります。この伝記では、みなさんに理解してもらえるはんにで、その点にもふれたつもりです¹¹⁾。

3. 原作の原作における納得のうなずき：バッティング技術開眼物語

久米が1961年版の「資料」で挙げた犠牲バント物語のあるベーブ・ルースの伝記物語は表1の1958年の白木(1910年-1977年)の作品と1954年のアメリカのVan Riper(1909年-1995年)の作品¹²⁾である。この二人の犠牲バント物語は一部異なるところがあるもののほとんど同じ内容であって、白木の物語はVan Riperの翻案であると言ってまちがいない。ここではまず翻案であることを確認しながら二人の物語の概要と特徴について述べ、その後、久米の物語とは大きな違いがあるにもかかわらず二人の犠牲バント物語が久米の物語の中で生かされていることについて述べる。言い換えれば、「三つライナー」から見ると白木とVan Riperの物語は原作の原作にあたると言ってよさそうなのである。

白木とVan Riperの物語の共通点はおおむね以下のとおりである。試合はジョージの学校内の試合である。ジョージにバントの指示が出されるのは、3回裏の攻撃でジョージの前の打者マリオがフォアボールで1塁に歩いた、ノーアウト、ランナー1塁の場面である。バントの指示を出すのはハーマン先生である(表5)。ジョージは1塁線にバントをしようとするが、ボールがバットの上側にあたってしまう、小さなキャッチャーフライとなってアウトになる。ベンチに戻ったジョージのところにマシアス先生が来て、表6¹³⁾に示した会話があり、その後、両チーム得点がないまま9回裏のジョージたちのチームの攻撃を迎える。2アウト後、マリオが相手のエラーもあってセカンドに進む。ジョージはマシアス先生に言われたとおりボールから目を離すなど自分に言い聞かせながら力いっぱいバットを振ると、ライト・オーバーのランニング・ホームランとなりジョージのチームの勝利に終わる。ジョージもチームメイトも皆大喜びであった。

では、どこが違うのか。最も異なっているのは試合展開で、Van Riperの物語では9回の裏まで0対0で進行しジョージのランニング・ホームランでジョージたちのチームが2対0で勝利したのに対して、白木の場合は1回の表で相手チームが1点先取し、9回裏のジョージのランニング・ホームランでジョージのチームが2対1で逆転勝利したことである。白木は、Van Riperの物語のままでは9回の裏にマリオがホームインした時点で1X対0で試合が終了してしまうので、ジョージの大ヒットがホームランになったことを生かすために逆転劇に変更したのであろう。これが白木の物語を翻訳ではなく翻案としている主な理

由である。その他に、Van Riper の物語ではジョージたちのチーム名がブラウニーズ (the Brownies) で相手チームがグリーンズ (the Greenies) であるのに対して、白木の方では赤チームと青チームであるといった違いや、Van Riper がジョージがバントをするのは初めてのことだとしている (表 5 の波線の下線) のに対して、白木はこれを削除しているといった違いなどもある。

表 5 Van Riper と白木の犠牲バント物語におけるバント指示前後の叙述

Van Riper (1959=1954, p. 80)	白木 (1958 年、83-84 頁)
<p>Then in the last of the third Mario got a walk. It was George's turn to hit. He grabbed the bat. "Now I'll show 'em," he thought. "I'll hit one so far they'll never find it."</p> <p>Brother Herman hurried over. He was acting as coach for both teams—and umpire as well. "George," he said, "lay down a bunt. Then you'll move Mario down to second, into scoring position."</p> <p>"A bunt?" George was startled. <u>He wanted to hit hard. He never had bunted before.</u></p> <p>Brother Herman was already back behind Rod, ready to call balls and strikes. George walked to the plate, mumbling to himself. <u>"A bunt! Aw, gee!"</u></p>	<p>三回にはいると、マリオが四球で一塁にあるきました。いよいよ、つぎはジョージの打つばんです。/ジョージは、バットをしっかりとぎりしめると、/(ようし、打ってやろう。おもいきりとおくへ、かっ飛ばしてやるぞ。)/と、けっしんしました。</p> <p>そこへ、アンパイアのハーマン先生がはしってきました。/ハーマン先生は、りょうほうのチームのコーチもかねているのです。/「ジョージ、いいかバントをするんだよ。マリオをセカンドにおくるんだからね。」と、ハーマン先生は、そっとひくい声でいいました。</p> <p>「ええっ、バントするんですか。」</p> <p>ジョージはびっくりしました。<u>おもいきり打ちたくて、しよがなかったのです。</u></p> <p>ハーマン先生は、もとのアンパイアのばしょへ、はしってかえっていきます。</p> <p>ジョージは、バッターボックスへはいました。 <u>(つまらないなあ……バントなんて。)</u></p>

白木と Van Riper の物語では、ジョージは 2 回うなずいている。ジョージのバント失敗後のマシアスとの会話 (表 6) の中で、1 回目は大きなヒットを打ちたかったんだろうという問いに対して「そうです」との肯定の返答としてうなずいている (破線の下線部)。2 回目は送りバントに成功していたら 1 点入っていただろうとの指摘に対して「確かにそうです。分かりました」という意味でうなずいている (点線の下線部)。これは納得のうなずきと言えるだろう。では、この物語はどんな物語と言えるのだろうか。この物語の特徴が最もよく現れているのは、ジョージがうなずいているところではないが、マシアスが、白木の方では 2 回目の「わすれちゃいけないよ」の後で、「打撃で、まずだいいちに、まもらなければならないきそくは、ボールから、けっして目をはなさないことなんだ」と述べ、Van Riper の方ではやはり 2 回目の“Remember”で始まる命令文の中で、“the first rule of batting is:

表6 Van Riper と白木の犠牲バント物語におけるバント失敗後のマシアスとジョージの会話

Van Riper (1959=1954, pp. 81-83)	白木茂 (1958 年、85、88-89 頁)
<p>Brother Matthias smiled and patted George on the back. “Too bad, George,” he said. “I guess you wanted to hit a long ball, eh?”</p> <p><u>George nodded.</u></p> <p>“Well, <u>just remember, baseball is a team game,</u>” said Brother Matthias. “A good batter must know how to bunt when it’s necessary.”</p> <p>Just then Johnny smashed a ground ball through the infield into center field. He stopped at first base, and Mario went to second.</p> <p>“<u>You see, George,</u>” said Brother Matthias, “<u>your team could have had a run now, if you had been able to advance Mario to second. Mario could have scored from second on that single.</u>”</p> <p><u>George nodded again.</u></p> <p>“You have the makings of a pretty good baseball player,” Brother Matthias went on.</p> <p>George could hardly believe his ears. He sat up straighter.</p> <p>“<u>On that bunt, you just took your eyes off the ball,</u>” said Brother Matthias. “Remember, <u>the first rule of batting is: Keep your eyes on the ball.</u>”</p> <p>Jack Frye, third baseman for the Brownies, struck out. That made two down. Bob Young came to bat.</p> <p>“There’s a lot to learn about baseball,” Brother Matthias said. “Would you like me to show you a few things in your spare time?”</p> <p>George nearly jumped off the bench. “Yes, sir!” he said, grinning from ear to ear.</p>	<p>マシアス先生は、にっこりわらうと、ジョージのかたをかかるとたきながら、/「ジョージ、きみはでっかいやつを、打とうとしたんだろ。」</p> <p><u>ジョージはうなずきました。</u></p> <p>「そうだろう。ジョージ、<u>わすれちゃいけないのは、野球はいつだってチームでやるゲームだということだ。</u>よいバッターというのは、ここぞというときに、うまいバントもできなきゃいけないんだよ。」</p> <p>マシアス先生が、ここまでいったとき、ジョニーが三遊間をぬくヒットをはなったのです。マリオは二塁にすすみました。</p> <p>「<u>ほら、わかったろう——きみがバントにせいこうして、マリオをセカンドにおくっていたら、いまの安打で得点できたんだからね。</u>」</p> <p><u>ジョージは、大きくうなずきました。</u></p> <p>「しかし、ジョージ、きみには野球の選手になれる素質が、じゅうぶんあるね。」</p> <p>マシアス先生は、そういいました。</p> <p>ジョージはびっくりして、先生のかおをまじまじとみつめます。</p> <p>マシアス先生は、にっこりわらうと、「<u>いまのバントのしっばいは、きみがボールから目をはなしたからなんだ。わすれちゃいけないよ——打撃で、まずだいいちに、まもらなければならないいきそくは、ボールから、けっして目をはなさないことなんだよ。</u>」</p> <p>そのとき、ジョージたち赤チームの、三塁手のジャックが三振しました。/これでツーダウンです。ポップがバッターボックスに立ちました。</p> <p>「野球には、うんとこさ、べんきょうすることがあるんだよ。きみのひまなときに、すこしずつおしえてあげようね。」/と、マシアス先生は、あいかわらずにこなしながらいます。/ジョージはうれしくてうれしくて、もうすこしでおどりあがるころでした。/「ほんとうですか、先生、おねがいます。ぜひおねがいます。」</p>

Keep your eyes on the ball”と述べているところであろう（波線の下線部）。そしてジョージは 9 回裏の打席ではバッターボックスの中で、「ボールから、目をはなさないんだぞ」（白木、90 頁），“Watch that ball!” (Van Riper, p. 83) と自分に言い聞かせて、ランニング・ホームランとなる大きなヒットを打ったのであった。バント失敗後のマシアスの助言からジョージはバッティング技術の基本原則（the first rule）を学びそれを実行にうつしたのであった。それゆえこの物語は、後のホームラン王誕生に繋がる、バッティング技術開眼物語と言ってよいだろう。それにしてもここでルール（きそく）という言葉が用いられていることが興味深い。

さて、白木と Van Riper の物語は久米の物語の中でどのように生かされているのだろうか。第 1 に、バントを指示された後のジョージの反応について、表 5 と表 2 を比較してみると、ジョージが思いきり打ちたかったのが久米の全ての物語（及び「三るいライナー」）と一致しており（表 5 と表 2 の実線の下線部）、「つまらないなあ」と思っているのが、白木と、「三るいライナー」の原作の可能性のある久米の 1961 年版、1973 年版、1981 年版との間で一致している（表 5 と表 2 の二重線の下線部）。第 2 は、ジョージのバント失敗後のマシアス発言に関することである。表 3 の久米の全ての物語に共通している、「野球は、ひとりでやるスポーツではないよ。みんなが力を合わせて、はじめてかてるんだ。さっき、きみが、うまくバントしていたら、一点はいつていただろう」とのマシアス発言（表 3 の二重線の下線部）は、表 6 のマシアスの野球はチームゲームだという発言（表 6 の実線の下線部）と「きみがバントにせいこうして、マリオをセカンドにおくっていたら、いまの安打で得点できたんだからね」という発言（表 6 の二重線の下線部）を合成・加工したものともみることができるだろう。久米が Van Riper の物語を直接利用しているか否かは判然としないが、白木の物語の記述が久米に利用され生かされていることは明らかである。

ではここで「三るいライナー」誕生の経緯をまとめてみよう。表 3 と表 6 の二重線の下線部の後のジョージの反応を比べると、久米の作品の中では 1959 年版だけが Van Riper と白木と同様に納得してうなずいており、ジョージのうなずきに関しては、Van Riper 及び白木の記述は 1959 年版では生かされていた。また、言うまでもなく白木の物語の原作は Van Riper であった。以上の確認の上で「三るいライナー」の誕生に至る犠牲バント物語の系譜を示せば、Van Riper (1954 年) → 白木 (1958 年) → 久米 (1959 年) → 久米 (1961 年あるいは 1973 年、1981 年) → 「三るいライナー」となるであろう。久米の 1959 年版はバントの指示にもかかわらずジョージに強打させたことによって犠牲バント物語を大きく転換させて道徳物語化の契機をつくり、1961 年版（～1981 年版）は野球の話を超えた生活全般に共通する規範からの逸脱を戒める物語に改作したことによって道徳物語へと変容したのであった。それをさらに約束破りの物語に改作したのが「三るいライナー」である。

おわりに

本稿を終えるにあたって本稿の課題からはそれるが以下の 2 点を補っておきたい。

第 1 は、砂田の犠牲バント物語が複数の漫画版で利用されていてその影響力が大きかったと考えられることである。八木一郎監修の漫画版では、試合終了後のマシアスは「ルースなぜバントをしなかったんです。スクイズで一点はいり勝っていたかもしれないのですよ。野球は九人で協力してやるものです。ボクシングやレスリングなど、一人でやるのとはちがうのですよ。自分のことばかり考えては野球はできません¹⁴⁾」と語り、吉田憲生監修の漫画版では「野球はボクシングなどちがって九人が力をあわせて戦うスポーツだ。たったひとりのわがままな行動がどんな結果をまねくかよくわかったね¹⁵⁾」と語っている。このマシアス発言は次の砂田の犠牲バント物語の結末に基づいたものであろう。発話中にボクシングやレスリングが出てくるのは砂田作品だけである。

「ルース、きみはなぜバントをしなかったのかね。」

ブロンドのかみをかきあげながら、先生はしずかに、しかし、きびしいひびきをこめていました。

「もし、きみがバントしていれば、一点とれて勝てたかもしれない。野球は、ボクシングやレスリングとはちがって、九人でやるものなんだよ。全員が力をあわせて、はじめて勝てるんだ。わかったね。」

ルースは、うつむいたまま、大きくなずきました。

このときの先生のことばを、ルースは一生わすれませんでした¹⁶⁾。

第 2 は、久米元一の子の久米譲がやはりベーブ・ルースの子ども向け伝記物語を書いていて、そこで描かれている犠牲バント物語は白木と同じく Van Riper の翻案で、白木よりも原作に忠実と考えられることである。試合はブラウニーとグリーンニーの対戦で、0 対 0 のまま 9 回裏を迎え、ジョージの活躍でブラウニーが 2 対 0 で勝っている。ただし犠牲バント物語の見出しは父親譲りの「チームのために」であった¹⁷⁾。

注

- 1) 村上敏治監修、奈良県道徳資料編集委員会編『奈良県版 3年生のどうとく』文溪堂、発行年未記載（奈良市中央図書館所蔵の書誌データでは1986年とある）、54-55頁。奥付の頁（裏表紙の見返し）にある「内容一覧表」に「三るいライナー」の「内容」が「規則の尊重」と記されている。
- 2) 表 1 に挙げた 10 作品は以下のとおりである。他に漫画版や紙芝居もある。なお、表中の 4 人の作者はいずれも児童文学作家である。
 - ① 白木 茂『ものがたり ベーブ・ルース』偕成社（児童伝記全集 19）、1958 年。犠牲バント物語は 79-92 頁。なお、白木にはこれ以前に『僕らのベーブ・ルース』英研社、1949 年があるが、これには犠牲バント物語はない。
 - ② 久米元一「ホームラン王 ベーブ＝ルース物語（第 3 回）」『たのしい三年生』第 3 巻第

- 3号(1959年6月)、64-73頁。犠牲バント物語は68-70頁。連載は1959年4月号から8月号までの5回。なお、①も②も挿絵は谷俊彦が描いている。
- ③ 久米元一「ベーブ=ルース」安倍能成他監修、朝比奈貞一他編『少年少女世界伝記全集 3(アメリカ編3)』講談社、1961年、201-296頁(伝記物語は289頁まで、290頁以降は年表等の附録)。犠牲バント物語は229-231頁。
- ④ 久保 喬「心の敵とたたかって 不良少年からホームラン王になったベーブ=ルース」日本子どもを守る会編『世界100人の物語全集 私はこんな人になりやい《6》真心をつくす物語』集英社、1963年、9-66頁。犠牲バント物語は25-26頁。久保にもこれ以前に『ベーブ・ルース』あかね書房(児童文学者協会編、小学生伝記文庫5)、1956年があるが、やはりこれにも犠牲バント物語はない。
- ⑤ 砂田 弘『ベーブ・ルース』小峰書店(幼年伝記物語19)、1972年。犠牲バント物語は33-36頁。
- ⑥ 久米元一『だっ子ホームラン王 ベーブ=ルース』講談社(少年少女講談社文庫B-9)、1973年。犠牲バント物語は62-65頁。
- ⑦ 砂田 弘「ベーブ=ルース」砂田 弘他『スポーツの世界にかがやく人びと ベーブ=ルース・ウィンパー・嘉納治五郎・クーベルタン』学習研究社(子ども伝記図書館4)、1977年、5-76頁。犠牲バント物語は17-19頁。
- ⑧ 砂田 弘『ベーブ=ルース』学習研究社(小学生世界の伝記8)、1979年。犠牲バント物語は35-38頁。
- ⑨ 久米元一『やくそくのホームラン ベーブ=ルース』講談社(火の鳥伝記文庫8)、1981年。犠牲バント物語は73-77頁。
- ⑩ 砂田 弘『ベーブ・ルース』小学館(国際カラー版世界の伝記15)、1983年。犠牲バント物語は27頁。
- 3) 原作者、久米の伝記物語や附録の年表ではベーブ・ルースは7歳の時(1902年)に寄宿制のセントメリー工業学校に入学し、1年生に配属されたことになっている。久米、前掲書(1961年)、220頁、235頁、293頁、及び、久米、前掲書(1973年)、20頁、25頁、186頁等。それゆえ物語の中の2年生のジョージは8歳になる。しかし、実際には入学後2年目の1903年には学校には行っていなかったようである。R・クリーマー(宮川毅訳)『英雄ベーブ・ルースの内幕(上)』ベースボール・マガジン社、1986年、39頁。
- 4) 久保、前掲書、25頁。
- 5) 引用は、砂田、前掲書(1977年)、19頁であるが、同一ないしはほぼ同じ文章が砂田の前掲書(1972年)、36頁、及び、前掲書(1979年)、38頁にある。
- 6) 久米、前掲書(1961年)、292頁。
- 7) 沢田 謙『世界の野球王 ベーブ・ルース』偕成社、1950年。久米の「資料」では1952年版が挙げられているが、初版は1950年である。沢田には1949年発行の『野球王 ベーブ・ルース』(偕成社)もある。1950年版(総頁236頁)は1949年版(総頁229頁)

に年表などを付けたもので、229 頁までの伝記物語の叙述は同じである。なお、表 4 の沢田からの引用文は現代かなづかいに改めている。

- 8) 赤坂包夫『ベーブ・ルース』ポプラ社（子どもの伝記物語 27）、1960 年。
- 9) 久米は「資料」で沢田の作品は中学生向きで赤坂の作品は小学生向きだと解説しているが、表 4 に見る限り二つの作品はほぼ同じ内容で赤坂の作品は沢田の作品を小学生向きに改作したもののように思われる。
- 10) 砂田、前掲書（1972 年）、114–115 頁。
- 11) 砂田、前掲書（1977 年）、74–75 頁。「ボクシングやレスリング」の記述は、砂田の前掲書（1979 年）、38 頁、及び、前掲書（1983 年）、27 頁にもある。
- 12) 久米が「資料」で挙げている Van Riper の著書は 1954 年版であるが、本稿では次の 1959 年版（沖縄県立図書館所蔵）を用いている。Guernsey Van Riper, Jr., *Babe Ruth, baseball boy*, Indianapolis: Bobbs-Merrill Co., 1959. 犠牲バント物語の見出し及び掲載頁は、“GEORGE GETS A BIG HIT”, pp. 78-85 である。1959 年版には、Copyright © 1954, 1959 とあって、1954 年版の重版のように思われるが、1954 年版（総頁 192 頁）にはない年表や参考文献などの附録（193–200 頁）が付けられている。この附録の一つに、Do you remember?として、本書の内容に関する 17 の疑問文が載せられていて、そのうちの犠牲バント物語に関する質問は、What did Brother Matthias tell George was the first rule of batting? (p. 196) である。Van Riper が犠牲バント物語を創作するにあたって、バッティング技術の基本原則「ボールから目を離すな」を重視していたことが伺える。なお、久米の「資料」の最後には、「この伝記を書くにあたり、白木茂先生から、きちょうなしりょうをおかりいたしましたことをかんしゃいたします」と記されていて、Van Riper の 1954 年版も白木から借りたものと思われる。
- 13) 表 6 では白木の 86–87 頁が抜けているが、この見開き頁には挿絵が挿入されていて、ジョージが打ったバントがキャッチャーフライとなって今にも捕球されるところが描かれている。
- 14) 八木一郎監修『かがやけるホームラン王 ベーブ＝ルース』学習研究社（学研まんが伝記シリーズ）、1977 年、41 頁。
- 15) 吉田憲生監修『ベーブ・ルース 不滅の大ホームラン王』集英社（集英社版・学習漫画世界の伝記）、1984 年、34 頁。
- 16) 砂田、前掲書（1977 年）、19 頁。
- 17) 久米 譲『ベーブ＝ルース』講談社（少年少女伝記文学館第 22 巻）、1989 年。犠牲バント物語は 96–101 頁。“the first rule of batting”のくだりは、「バッティングのひけつは、一にも二にも三にも、ボールをよく見て、すなおにバットを振ることなんだ」（99 頁）と訳されている。